

【一般入試編】英語外部検定利用大学は 前年比 4 割増の 152 大学！ すべての学問系統で利用率アップ！

旺文社 教育情報センター 29 年 12 月 7 日

大学入試の英語科目に代わる試験として注目される「英語外部検定」(以下、外部検定または検定と表記)。33 年 1 月からスタートする大学入学共通テストにおいて、国立大学では一般入試の受験者全員に外部検定を課するという方針が発表されたこともあり、今後さらに利用が加速するのは間違いない。ここでは 30 年度の一般入試での利用状況について見ていこう。

なお、推薦・AO 入試編は以下を参照のこと。

http://eic.obunsha.co.jp/resource/pdf/exam_info/2017/1016_2.pdf

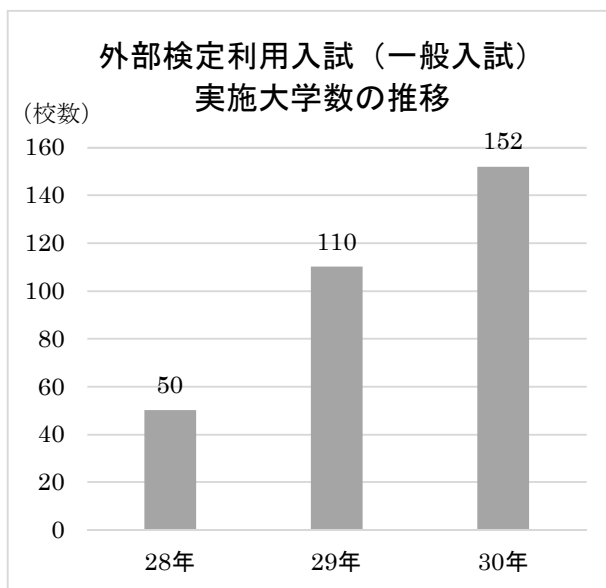
● 昨年比 40 大学増と着実に拡大！

外部検定が本格的に一般入試に導入されて 4 年目となる。30 年度も外部検定の利用は広がりを見せている。30 年度の一般入試で外部検定を利用する大学は 152 大学、日本国内の全 762 大学の 19.9% となった。昨年と比べて 42 大学も増加した。152 大学の内訳は、国公立大 17 大学 (昨年 14)、私立大 135 大学 (昨年 96) だった。

30 年度、外部検定利用入試を新規に実施した大学は以下の通りだ。

【国公立大】茨城大、九州大、佐賀大

【私立大】北海学園大、東北学院大、日本赤十字秋田看護大、東日本国際大、高崎健康福祉大、東京国際大、江戸川大、千葉科学大、国士舘大、駒澤大、産業能率大、実践女子大、白百合女子大、聖心女子大、拓殖大、東京女子大、東京都市大、文京学院大、目白大、修文大、名古屋商科大、日本赤十字豊田看護大、びわこ学院大、京都外国語大、京都産業大、京都精華大、同志社女子大、大阪工業大、関西外国語大、四天王寺大、桃山学院大、神戸海星女子学院



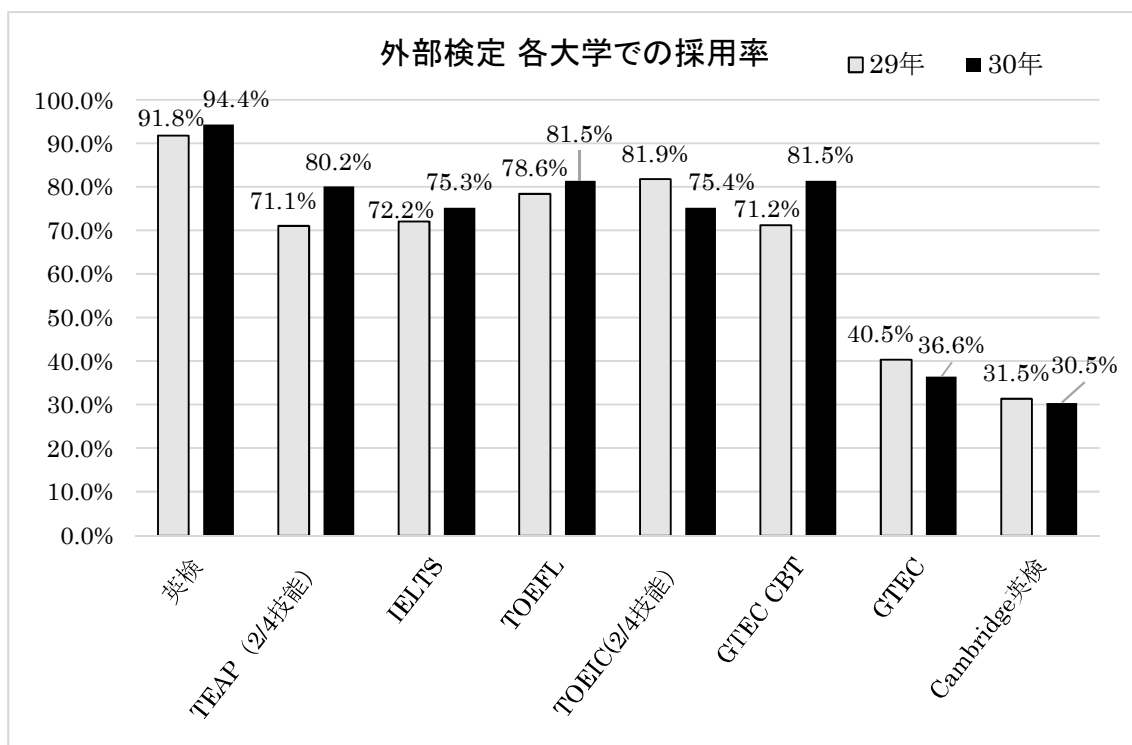
大、神戸女学院大、畿央大、広島国際学院大、九州産業大、西南女学院大、中村学園大、長崎国際大、熊本学園大

大規模校でない大学を含め、幅広い大学が導入してきたことがわかる。一般入試での外部検定利用は、もはや珍しいものではなくなったと言えよう。

●全ての検定が採用数アップだが、「採用率」には差

下のグラフは、各大学の一般入試で利用できる検定の採用率だ。ほとんどの大学で利用できるのが英検。これまでも、推薦・AO入試、一般入試とも一貫して採用率はトップだったが、今回も同様だ。大学入試での利用を目的に作られた TEAP は 80.2%で、昨年の 71.1%から増加した。

一方で、今回の集計では採用率が減少した検定もある。GTEC (40.5%→36.6%)や TOEIC (81.9%→75.4%)だ。これらの検定は、採用校数そのものは増えているが、全体の実施校数がそれ以上に増えたため、割合としては減少した。GTEC は 3 技能の試験を基本とし、スピーキングをオプションとしていること、TOEIC は主にビジネス英語を扱っていることが原因ではないかと考えられる。



※各大学の外部検定を利用しているすべての入試方式（一般入試）のうち、それぞれの検定が採用されている割合。

※原則、学科単位で集計。1学科で複数の入試方式がある場合、外部検定の利用方法が同じなら「1」、異なれば別々に計上。

※各外部検定の採用については、募集要項等に記載されているものすべてを計上。「それに準ずる検定でも願可」などの記載の場合は、上記すべての検定が採用されているとして集計。

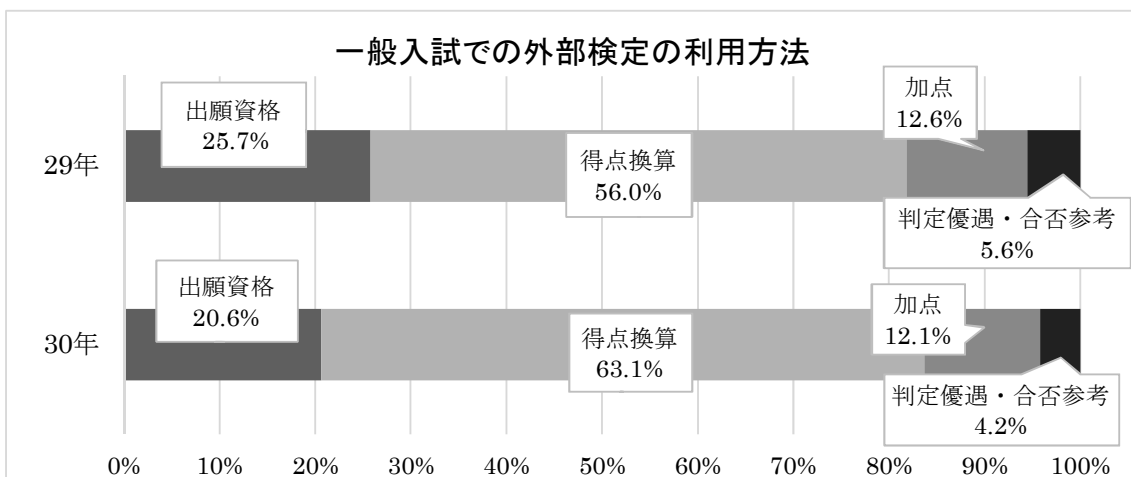
●「得点換算」での利用がさらに増加

一般入試での外部検定の利用方法は現状、「出願資格」「得点換算」「加点」「合否参考・判定優遇」4つのいずれかに分類される。特に多くの大学で導入されているのが「得点換算」だ。29年度時点で56%と半数を超えていたが、30年度入試では63.1%とさらに増加。一方、「出願資格」として課す大学の割合は減少し、全体の2割程度となった。

「得点換算」は、級やスコアに応じて、外部検定を大学独自の試験やセンター試験の科目の得点に換算するもの。一般入試では学力試験がメインとなるが、得点換算を取り入れることで大学としては英語力の高い受験生を優遇することができる。受験生としても、ある程度の得点が担保されるので、英語以外の科目に力を入れることができるという利点がある。

一般入試で外部検定が利用され始めた2、3年前は、「得点換算」と言っても満点換算、いわゆる「みなし満点」しか設定しない大学が中心だった。しかし昨年からは、「英検2級で80点、準1級で100点」のように細かく段階をつけて換算する大学が増えてきた。30年度は、「得点換算」として利用する入試のうち58.7%が、段階的に換算を行うとしている。29年度の32.7%から、段階を刻む換算方法が急速に普及した。なかには立教大のセンター試験利用入試のように、1点単位で細かく得点換算を行うという大学も登場しており、各大学が独自の利用法を導入してきている。

また、昨年と同程度の1割強が実施しているのが「加点」だ。「得点換算」と同様に、こちらも級やレベルに応じて段階的に得点に加点するというケースが増えており、30年度は「加点」を行う入試の76.8%で段階を刻んだ利用方法を取っている。こちらも29年度の50.1%から大幅に増加している。



※各項目の例。

【出願資格】「英検2級以上を出願要件とする」など。

【得点換算】「英検2級以上は個別試験の英語を80点に、準1級以上は100点に換算する」など。

少数だが、試験免除（「英検2級以上を取得している場合、個別試験の英語を免除する」など）も含む。

【加点】「英検準2級以上はセンター試験の英語に10点、2級以上は20点、準1級以上は30点加算する」など。

【判定優遇・合否参考】「英検準2級以上を取得している場合、合否判定の際に優遇する」など。

●採用レベルにも変化。CEFR A2・B1レベルが増！

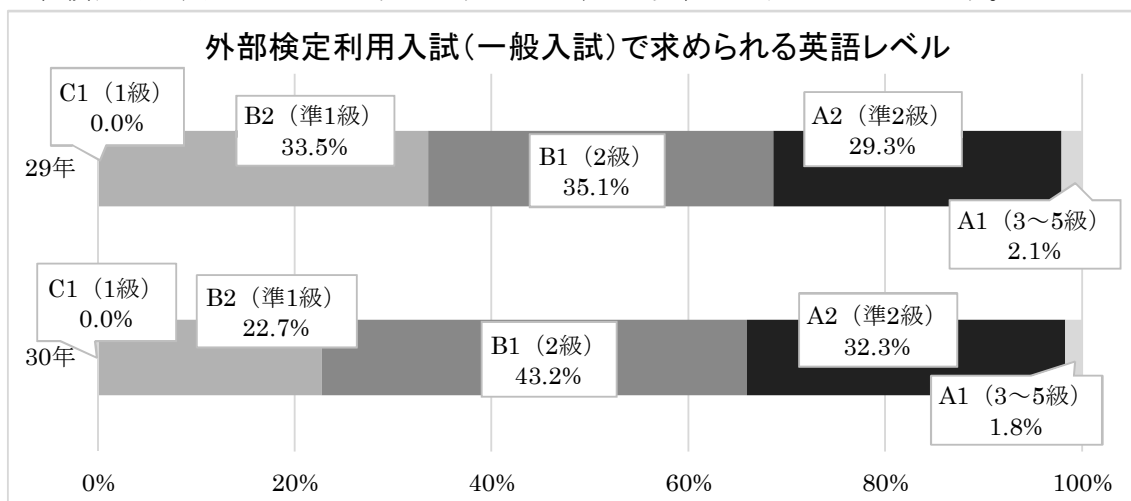
下のグラフは各大学の一般入試で利用できる外部検定のレベルを集計したものだ。級やスコアに応じて段階的に優遇を行う大学は「最易レベル」で集計している。CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠＝言語の運用能力レベルを示す標準規格）のレベル別で見ると、29年度は B2（英検準1級）・B1（同2級）・A2（同準2級）の各レベルが約3分の1ずつという割合だったが、30年度は B1 の割合が 35.1%→43.2%と増加、逆に B2 は 33.5%→22.7%と大幅に減少している。利用の最低基準が易しくなったということだ。その理由は大きく分けて3点ある。

1点目は、段階別の換算・加点の設定だ。「みなし満点」のみ設定していた大学が段階別の換算を導入したことで、基準が易しくなった。

2点目は利用できる英語レベルを下に広げた大学があること。最低基準を下に上げるとともに段階的に得点換算・加点を行うことで、受験生が利用しやすくなった。たとえば千葉工業大を見ると、29年度入試では 80%、90%、100%の3段階で独自入試等の点数に得点換算しており、80%の基準は「英検 CSE 2120点」「TEAP 260点」「TOEFL iBT 50点」などだった。これが30年度入試では、さらに1段階、70%の換算が追加され、「英検2級」「英検 CSE 1950点」「TEAP 225点」「TOEFL iBT 41点」などに変更された。より幅広い受験生に訴求できる変更だ。

3点目は新規実施大学だ。はじめに述べたように、実施大学は42増えている。これらの大学が比較的低い基準で導入したため、全体を押し下げた。

ただし、ここで示したのはあくまで「最易レベル」。「得点換算」「加点」の場合、これより高い級・スコアを持っていれば、当然より有利な条件で優遇を受けられる。つまり、外部検定利用入試全体のレベルが下がったということではなく、より多くの受験生に門戸を開き、積極的に利用してもらおうというポジティブな変化だと捉えてよいだろう。



※各検定で、級・スコアが明記されているものを CEFR レベルに換算し集計。

※かつこ内は英検の級に換算した場合。

※検定の級・スコアに応じて段階別に優遇を行う場合、最易レベルを集計している。

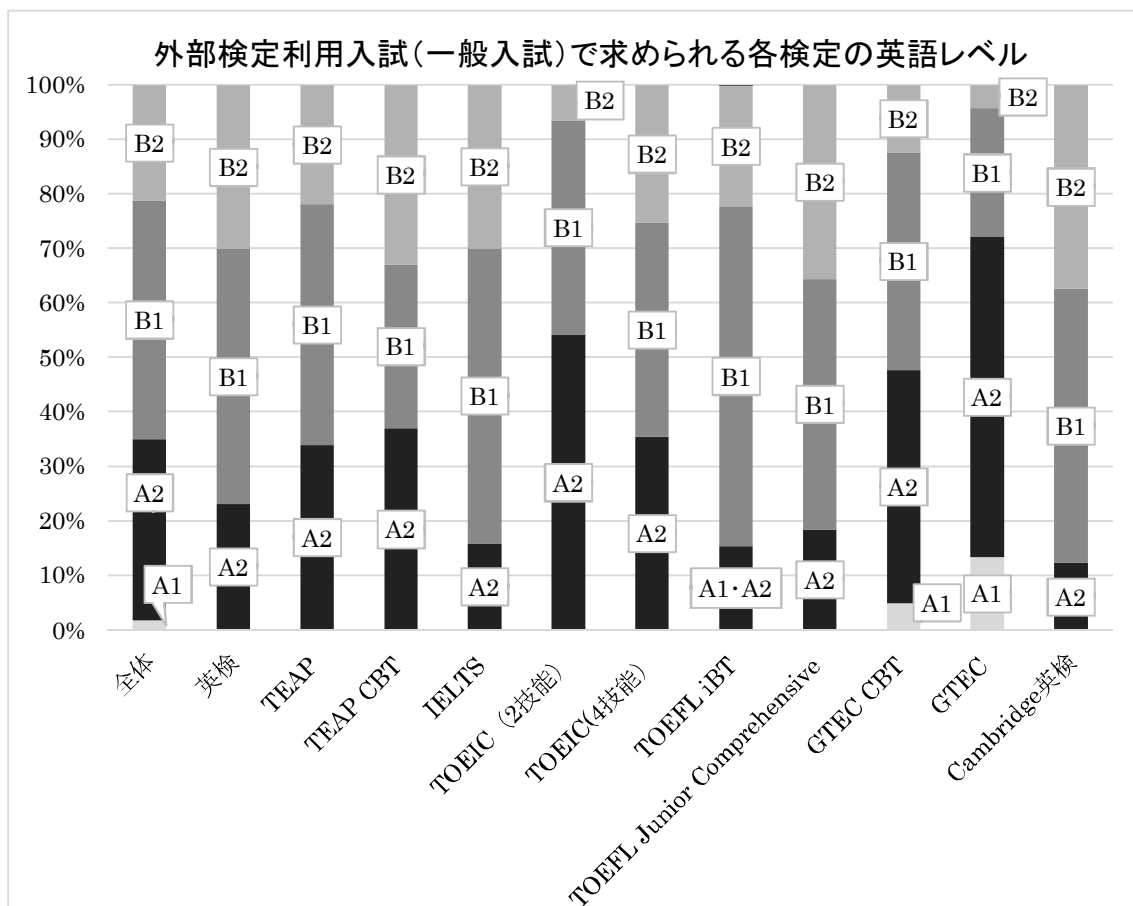
●TEAP がバランス良。検定によって異なる CEFR 分布

大学によって利用できる外部検定が異なるのは前述のとおりだが、これは各検定が測定を得意としている英語レベルと関連している。つまり高いレベル、低いレベルを求める大学で、利用できる検定に特徴が見られる。

下のグラフは検定ごとに、利用できる大学で求められる英語レベル（最易レベル）を集計したものだ。いちばん左の棒グラフは、すべての検定の平均を示している。これにもっとも近いのは TEAP。各レベルがバランスよく利用されていることがわかる。英検も、やや B2 が多いがバランスよく利用されている。

より高いレベルでの利用が多いのは、IELTS、TOFFL、Cambridge 英検など。これらはもともと英語圏の国の団体が作成したものであり、留学や海外で暮らす能力を測ることを主目的としている。この特性上、B1 以上の高いレベルで利用されるのが主になっている。

一方、GTEC CBT、GTEC を見ると、A2 に集中しており、A1 も目立つ。特に GTEC は中学生からを受検対象としており、大学受験としてはやや易しいレベルを測るのに適した検定だと言えよう。



※各検定で、級・スコアが明記されているものを CEFR レベルに換算し集計。

※検定の級・スコアに応じて段階別に優遇を行う場合、最易レベルを集計している。

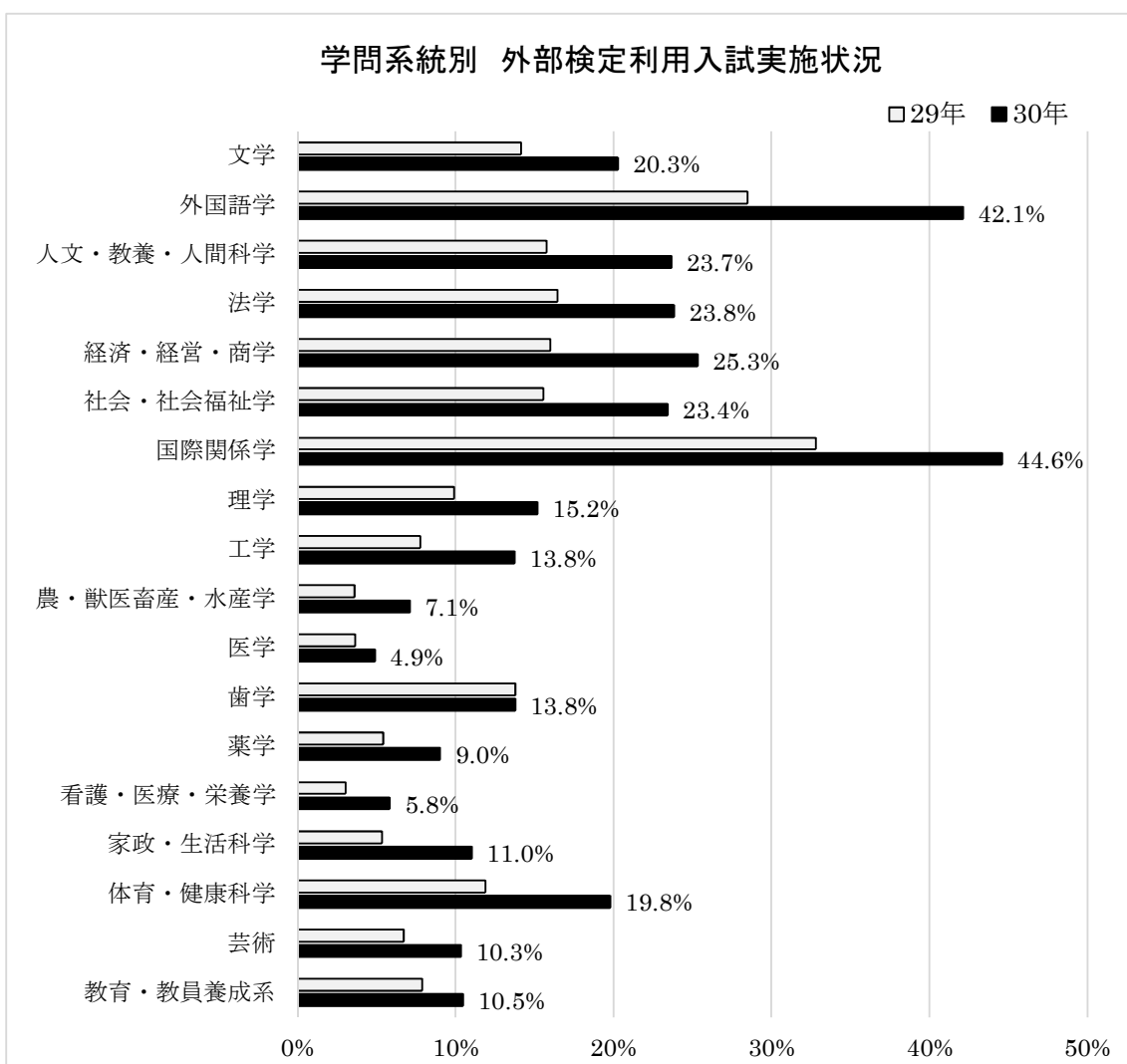
※TOEFL iBT の CEFR は B1 以上のみ設定されているため、それ以下は A1・A2 と表記している。

●外国語学部、国際関係学部系統で高い利用率

30年度一般入試で外部検定を利用する学科を、学問系統別に示したのが以下のグラフだ。それぞれの学問系統に該当する、全国の大学の全学科を100として、外部検定を利用する学科の割合を示している。

もっとも利用率が高いのは、やはり「国際関係学」系統だ。全体の44.6%と半数に迫っている。「外国語学」系統も42.1%と4割超え。英語に力を入れているこの2系統で目立って利用率が高い。29年度→30年度の伸びを見ても、「外国語学」がトップの13.6%、「国際関係学」が11.8%と続いており、特に積極的に外部検定を利用してきている。「文学」「経済・経営・商学」など文系の各系統はいずれも20%～25%で利用されており、大きな差はない。

すべての系統で、昨年以上の利用率となっており、外部検定利用入試の広がりや学部・学科の系統を問わないこともわかる。どのような学部・学科を目指すとしても、今まで以上に英語力が問われることになる。



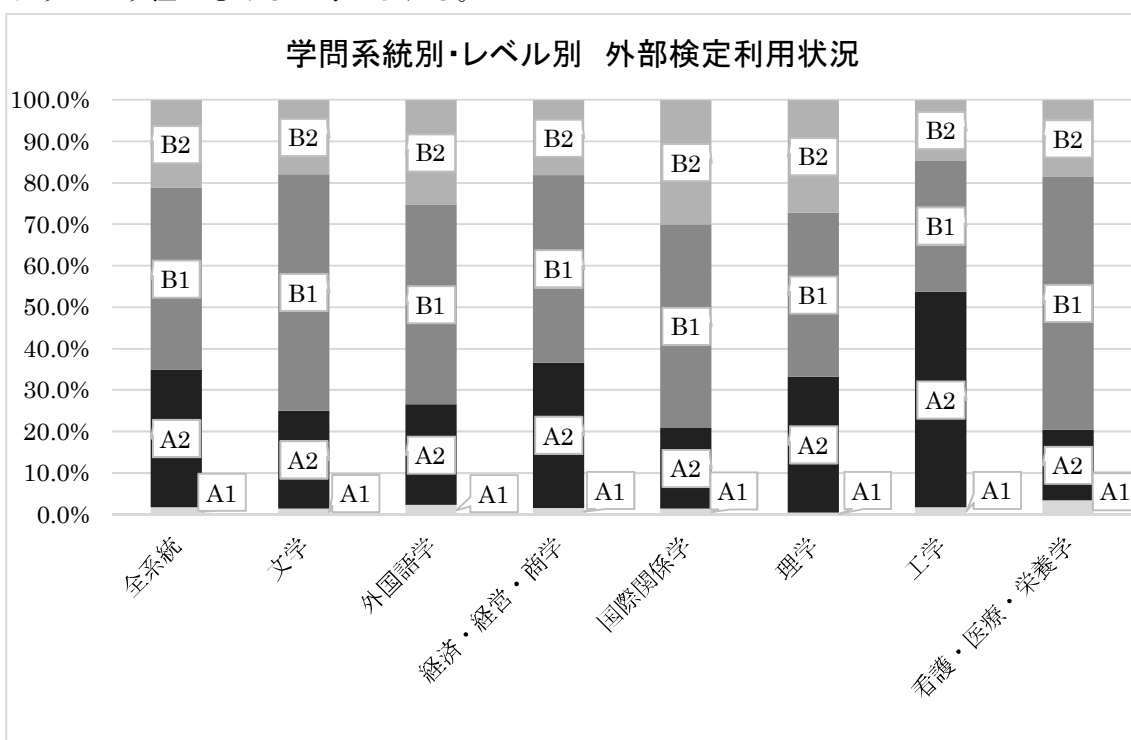
※『螢雪時代 4月臨時増刊「全国大学 学部・学科案内号」』の学問系統をもとに作成。

※複数系統に該当する場合、すべての系統に分類（例：国際資源学科→「国際関係学」「理学」「工学」）。

●高いレベルを求める国際関係学、裾野の広い工学

次に、利用の多かった系統を取り上げ、求められるレベルを詳しく見てみよう。いちばん左は全ての系統（ここで取り上げた系統以外も含む）を表している。B2 レベルの高い英語力を求めるのはやはり「国際関係学」。B2 が約 3 割を占める。この「国際関係学」はほかの系統と比べて、得点換算で段階を設けず「みなし満点」のみを設定している大学が多く、このことも系統全体としてレベルを上げる要因となっている。

一方、易しいレベルから利用できるのは「工学」。A2 が 52.0%と半数を超えている。幅広い大学で外部検定が導入されていることがその理由だ。また、比較的易しいレベルから導入することで、英語の得意でない理系の受験生に英語の得点を担保し、積極的に受験してもらおうという狙いもあると考えられる。



※『螢雪時代 4月臨時増刊「全国大学 学部・学科案内号」』の学問系統をもとに作成。

※学問系統が複数に該当する場合、両系統に分類（例：国際資源学科→「国際関係学」「理学」「工学」）。

※検定の級・スコアに応じて段階別に優遇を行う場合、最易レベルを集計している。

●今後も拡大が予想される外部検定利用入試

以上のように、30 年度入試においても外部検定を利用する動きは活発だ。利用大学は急激に増加している。また、利用方法を見ても、各大学が工夫をしてくれており、利用できる検定の種類やそのレベルも広がってきている。

冒頭でも述べたように、センター試験に代わる「大学入学共通テスト」でも外部検定が利用されることとなり、外部検定が大学入試の一部として存在感を増していくことになる。来年度以降も、どの程度の数の大学が外部検定利用入試を導入してくるのか、どのような利用法を取ってくるのかなど、注目が必要だ。